

ラジオドラマ脚本

グループ「語り部 KOBÉ 1995」

タイトル「私に語る資格はあるのでしょうか」

登場人物表

田村勝太郎さん（73）

語り部 KOBÉ 1995 の代表。阪神・淡路大震災で自宅が全壊する。

山本はなさん（20）

阪神・淡路大震災震災後に神戸で生まれた，神戸の大学に通う大学生。

ラジオドラマの対象

このラジオドラマは，被災地で語り部活動を行う語り部，そして被災談を後世に語り継ぐ役割を担う次世代の若者を対象に制作された。

ラジオドラマの制作目的

2016年で阪神・淡路大震災から21年目を迎えるにあたり，「語り継ぎとは何か」について捉え直し，語り部 KOBÉ 1995 の今後の展望を考えることを目的に，このラジオドラマは制作された。この取組では，語り部メンバーによって語られる「被災の経験談」の内容にのみ注目するのではなく，被災の経験談を十年以上にわたって語り続けることで「語り部自身に変化してきたこと」，そして被災の経験談を語ることそのものが「語り部にとって人生の一部」として特別な意味を持つてきたという事実に注目して，ラジオドラマが制作された。

1. 「私に語る資格はあるのでしょうか」

(BGM) 「忘れ物 (オルゴールの♫拍子小曲)」

〇とある大学の1室

向かい合って、田村が山本に話をしている。

田村

「阪神・淡路大震災が起きた時、当時私は、小学校の先生をしていました。母と2人で住んでいた木造二階建ての建物は、ぐらぐらっという大きな揺れと同時に全壊しました。私は壊れた窓から外に出ました。一階に寝ていた母親は偶然こたつに潜ったので、瓦礫に埋もれてしまいました。が数時間後、近所の人によって、無事に助けられました。それから近所の人は・・・」

山本 (≡)

私は、阪神・淡路大震災震災の後に神戸で生まれた、神戸の大学に通う大学生。大学で防災について学んでいて、授業を通して、阪神・淡路大震災についての語り部をしている田村さんに出会った。私は神戸で生まれ神戸で育った神戸っ子だが、震災のことは写真でしか知らない。神戸市民である以上、「防災について関心を持つ」と大学の同級生に声高に言うものの、私自身、防災に対して正直しっくりこない。阪神・淡路大震災は、どうしても他人事なのだ。田村さんの話を聞きながら、ふと思いついた疑問を、私は田村さんに投げかけてみた。

山本

「あの、すみません。ちょっと質問してもよいですか。田村さんは、どうして語り部を始めたんですか。」

山本 (≡)

なにげなく尋ねた私の質問。何度も聞かれてきた質問だと思ひ、気軽に尋ねてみた。しかし、私の予想に反して、田村さんはぐっと押し黙ってしまった。

田村

「私に語る資格はあるのでしょうか。」

山本

「え・・・どういことですか。」

山本 (三)
予想していなかった、田村さんの答えに私は驚いてしまった。

田村
「私は、阪神・淡路大震災から二〇年を迎えた時、ずっともやもやと悩んでいたんです。私に阪神・淡路大震災のことについて語る資格はあるのか、このまま語り部として活動を続けていくべきなのか、と。」

山本
「えっと、それはどういうことですか。田村さんは、阪神・淡路大震災で被災したんじゃないんですか。」

田村
「確かに私は、阪神・淡路大震災で自宅が全壊しましたが、でもね……。」

山本
「でも……何なんですか。」

田村
「でも、私は震災で、誰か身内を亡くしたわけじゃないんです。阪神・淡路大震災では、六四三四人の方が亡くなりましたが、私の身内で誰かが亡くなったわけではないんです。」

山本
「それが、どうして田村さんの悩みになるんですか。」

山本 (三)
私は疑問で頭がいっぱいになりながら聞いてみた。

田村
「震災後、私は一〇年以上、阪神・淡路大震災の語り部をしてきました。あの時のことを忘れてはいけない、語り継ぎをしなければならぬという思いで語り部を始めました。ただ、一〇年以上語り部の活動を続けるということには、本当に大変なことなんです。語り部を続けるためには、強い思いがないといけないんです。語りをするためには体力が必要だし、語り部の依頼の電話受付や予定の管理もしないといけない。これって思っている以上に大変なんです。私が代表をしている語り部グループには、阪神・淡路大震災で大切な身内を亡くしたメンバーがいます。阪神・淡路大震災のことを伝えていこう、語り部を続けていこうという思いが、大切な家族を亡くした彼らと比べて、どうしても私は弱いんです。語り部を続けていこうという動機が強いとは言えないんです。だから、震災から二〇年

の節目を迎える時に、私は語り部を続けるべきなのかと、もやもやと悩んだんです。」

山本 (三)

語り部である田村さんからは、被災当時の状況についての生々しい話を聞くだろうと思っただけに、とても意外な言葉だった。

山本 「でも・・・田村さんは語り部の活動を、今も続けていますよね。その悩みは、解決したんですか。」

田村 「そうだね・・・その悩みは無くなったとはいえないです。でも、語り部の活動に対する思いが変わったんです。ぼくには、ぼくにしかできないことがある、と思うようになったんです。」

山本 「田村さんにしかできないことって・・・何ですか。」

田村 「それは、震災の時にお世話になった人、避難所で輝いて頑張っていた人、そして今でも地域防災で頑張っている人を、私の語りを通していろんな人に紹介してあげることだと思っただんです。いろんな人の話を僕の語り部活動の中で紹介してつなげていくことが、ぼくの役割なんじゃないかなと思っただんです。」

山本 「どんな人たちのことなんですか。」

田村 「例えば、僕は避難所の小学校で、ある子どもたちに勇気づけられました。避難所はとても寒く、みんな毛布にくるまってじっと寒さに耐えています。せつかく震災で助かった命なのに、病気になるってしまうんじゃないかと心配でした。そこで、避難所の小学生たちと協力して、運動場の一角にカフェを作ったんです。インスタントコーヒーや紅茶、おかきの救援物資を持ち寄ってね。その時に、子どもたちは本当に頑張ってくれました。子どもたちがカフェで頑張っている姿や声を聞くことで、避難所のお年寄りはとても喜んでくれました。避難所はとても苦しい生活でしたが、輝いて頑張っていた子どもたちがいたことを、僕は語り部活動の中でいろんな人に教えてあげたいんです。」

田村

「それに、震災から数年後に出会った、ぼくの幼なじみのこともみんなに知ってもらいたいです。彼とは小学校からの同級生で、阪神・淡路大震災で息子を亡くしました。その後、二度と同じ悲劇を繰り返してはいけないという思いで、近所の人と一緒に防災活動を今も続けています。彼は「普段付き合いこそ最大の防災」という信念を持っていて、防災活動だけではなく、地域で焼き肉パーティーや餅つきも熱心に行っています。そういう人たちがいるということ、僕の語りを通じて知ってもらいたいです。」

山本

「語りを通じて知ってもらう、ですか。」

田村

「そう。僕の話だけじゃなくて、いろんな人の話をしたいんです。語り部ってそういうことだと最近思うようになったんです。私が知っていることは限られています、他の人のことを誰かに伝えることで、もっと語りの幅を広げることができる。これが僕の語り部としての役割だと思ふようになったんです。語り部とは、単に自分の思い出を語るだけじゃないんです。語りで人と人をつなげることなんです。それが語り継ぎなんです。」

山本

「語り“継ぐ”ことが、役割ですか。」

山本 (三)

阪神・淡路大震災を直接体験したことがない私にとって、阪神・淡路大震災はどうしても他人事だった。その経験の差が、埋められない溝として、ずっと私のところにひっかかっていた。それが田村さんの話で少しずつ変わりつつあることを感じていた。

田村

「被災の事実は、人が語らずとも写真や映像によってリアルに伝えることはできます。でも、何故言葉によって、私が語り継ぎを続ける必要があるのか、その理由を考えてみました。それは、本気で防災について考えるために、私の語りで人と人、思いと思いをつなげる必要があると思つたからです。阪神・淡路大震災についての語り部団体は、震災の発生から二十年経つとともに年々減つてお

り、若い人たちと私達の語りをつなげていくことが大切だ
と思っています。」

山本 (三)

人と人の思いをつなぐための語り継ぎ。必ずしも、本人の
経験を話すことのみが語り部の役割ではない。被災体験の
ない私に、なにかできることがあるのではないか。

山本

「あの・・・田村さん、私にも語り継ぎ、できますか。」

田村

「うん、できるよ。あなたは、誰にどのように、今日の話
を語り継ぎますか。」

(BGM) 「忘れ物 (オルゴールの ♪ 拍子小曲)」

(終わり)

※なお、脚本中の (三) とは、Monologue を意味し、人物の独白の言葉。